慈濟

ものがたり

ツーチー　2021年8月　296

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

衆生と霊を護り、疫病の厄災を鎮める

疫病の大災害は、人類が阻止できるものではなく、
口の欲が続けば、世の安泰は難しいでしょう。
敬虔に戒慎し、斎戒して防疫に努め、
生命を護り、物を大切に使って、
広くこの世に幸福をもたらしましょう。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
一緒に霊山法会に参加しよう　善耕／訳　4

【主題報道】
経典劇を演じる～静思法髄・妙法蓮華経　慈願／訳　8
仏陀が悟りを開いた心境を追い求める　慈願／訳　10
無形の法理、有形の表現　常樸／訳　16

【国際慈善】
世界で新型コロナウイルスの感染が再び拡大　田中亞依／訳　28
二つのサイクロンに襲われたモザンビーク
慈済チームが自発的に集結　田中亞依／訳　39

【新書のすすめ・『どの瞬間も良い時』】
山を乗り越えてから　荳荳／訳　52

【證厳法師のお諭し】
天から任された重責を皆で担う　慈願／訳　64

【慈済の55年】
寿桃に秘められたソフトパワー　惟明／訳　70
それぞれ苦難が異なる衆生に、
臨機応変に対応する　心嫈／訳　78
回収資源の価格が変動しても
リサイクル活動を止めてはいけない　心嫈／訳　83
もし、台湾独自の骨髄バンクがなかったら　荳荳／訳　88

【行脚の軌跡】
心の超越　済運／訳　93

【防疫と人助けの両立】
慈済骨髄幹細胞センターの新しい挑戦　江愛寶／訳　98
七月の出来事　済運／訳　107

表紙

『静思法髄妙蓮華』経典劇が、５月初めに花蓮静思堂で初演された。台湾で著名な４大芸術文芸団体が共に投入したその舞台は、慈済ボランティアの律動によってまるで法海が出現したかのように演出され、慈済が５５年間にわたって人間（じんかん）を守ってきた信･願･行（教義を深く信仰し､済世の切願を持ち、身を以て実践すること）を表現した。

一緒に霊山法会に参加しよう

◎訳・善耕

慈済五十五周年にあたり、慈済手話による『静思法髓・妙法蓮華経』の経典劇が五月三日と五日に初めて花蓮の静思堂で上演された。これは、二〇一一年の『法は水の如く』経典手話劇に続く、大規模な仏教の法会である。

それと同時に證厳法師は、インドの新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めが掛からず、既に二十数万人が亡くなっていることを心配していた。慈済は五月六日、オンライン祈福会を催した。慈済の医療体系を含む世界二十五の国と地域の慈済人が参加し、心と愛を募ってインドに医療物資と生活物資を支援し、現地の宗教団体を通じて、民衆に提供することを期待した。

その一週間後、台湾でも感染が拡大し、一日の新規感染者が二百人を超えた。長期にわたって保っていた国内感染がゼロの状態が一変し、台湾全土で全面的な警戒体制が敷かれ、あらゆる業種と人々の生活は必然的に調整を迫られた。

挑戦はそれだけにとどまらなかった。證厳法師はこう丁寧に指摘した、「今、世界を巻き込む災害が頻発していることからして、大宇宙も小宇宙も調和が取れていないことが分かりますが、この時こそ一層人心には仏法が必要なのです。敬虔に斎戒し、殺生せず、諸々の欲念に対して懺悔することによってのみ、人々の愛を大きくさせることができるのです。絶えず心を善良に保ち、善行を行い、分秒を把握するよう呼びかけ、寸分も方向が偏らないようにしてこそ、災厄をはらう万能薬となるのです」。

半世紀余りを経てきた慈済は、貧困救済から慈善の行いを始め、證厳法師は「仏教の為、衆生の為」という印順導師の言い付けを守って、多元的な志業を世界に展開してきた。慈済人は種種の利他的行為の中から、自浄其意（じじょうごい：自ら心を清らかに保つ）の必要性を体得している。例えば法師が初期に木造の小屋で修行した頃、『法華経』を礼拝して、清浄かつ透徹した境地を感受し、この法脈精神をもって後日、慈済宗門を立ち上げたのである。

今回、慈済の記念日に演出する『静思法髄妙蓮華』の経典劇は、単純な一回限りの公演ではない。演じる前に、半年以上、経典の内容を学ぶ読書会が開かれ、出演者は如何にして生活の中に取り込むかを分かち合った。そして、経典劇に使われる楽曲や慈済手話の練習を繰り返し行う過程で、体と精神、情感を全力で投入したのである。

法師はかつて、「人の命ははかなく、「慧命」だけが泰山よりも重い、それを連綿と受け継ぐことで、後世の人が絶えず前進でき、また、困難に直面した時にそれを乗り越えることができるのです」と言ったことがある。慈済人の精神力は自利利他（じりりた）から来ている。つまり、法華経の精神は時空を超越した仏教の伝承なのである。

コロナ禍が深刻になる中、大衆が感染症対策に協力し、恐怖心を持つのではなく、誠意でもって自助と人助けすることを願っている。仏典にあるように、霊山は自分の心にあり、霊山法会（読書会と修行の集い）に参加して初めて、共に困難を乗り越えることができるのである。

（慈済月刊六五五期より）

主題報道

経典劇を演じる

《静思法髓・妙法蓮華経》

二千五百年余り前、仏陀は霊鷲山で『法華経』を説法した。現在この時に、私たちは『静思法髓・妙法蓮花経』の経蔵劇を演じて古今を結ぶ。劇中の朗誦と舞踊、太鼓を通して法華経の真髓を伝え、歓喜に満ちた格別な霊鷲山法会を、過去から現在、そして未来へと永遠に続くものにするのである。

『静思法髓・妙法蓮華経』の経典劇は、敦煌壁画を背景に始まり、現代の宇宙大覚者の仏像並びに飛天を融合させ、数百人の慈済ボランティアによる敬虔な「炉香讃」の朗誦で、荘厳な浄土の形象を表した。（撮影・蕭耀華）

仏陀が悟りを開いた心境を追い求める

講釈・證嚴法師　編集・編集部　訳・慈願

法華経の精神とは、仏陀が悟りを開いた精神に他なりません。心境は無限に広々として、宇宙萬物の真理に透徹しています。誰もが仏性を持っていることを悟り、自覚してから人を目覚めさせるのです。

二千五百年前、この世に生を受けたシッダールタ王子でも、私たちと同じように生、老、病、死の苦を経なければなりませんでした。一国の高貴な王子として、宮廷内で父王の保護の下に成長したため、初めは世間に存在する苦を知りませんでした。その後、或る因縁によって城門を出て、当時のインドの様子を見て回るうちに人間の苦を感じました。一生富貴栄華を享受したとしても、避けられない感情のもつれが最終的には苦なのです。

王子は生命の真諦（真の意義）を探し求め、衆生の解脱を助ける道を見つけたいという志を立て、一切を放下して追い求めました。数年間の訪問と苦行、静思を経て無明の煩悩が一つ一つと取り除かれ、心がとても清らかになりました。或

る日の夜明け前、心と外部の世界がとても静かな時間に、正座中の瞼をゆっくり開けると、遠方の空で瞬く明けの明星が見えました。その瞬間に、心が無限に広がり、心身と宇宙が一体となった時、王子は悟りを開いたのです。

「仏陀はこの世の苦難を見て、人間（じんかん）で修行し、宇宙の真理を悟った後、解脱したため、二度と世間の人事物に纏われることはありませんでした」。しかし、衆生の苦を忍びなく思い、説法して衆生を済度し、人に自性が即ち仏性であることを知ってもらいました。仏陀が説法して四十二年後、以前説いていたのは方便の教えでしたが、晩年、霊鷲山では真実の教えを講釈しました。それが『法華経』です。それは仏陀の理想であり、未来の衆生が仏法を人間（じんかん）に根付かせ、菩薩道に励むことを願ったものです。

仏陀は『法華経』を講釈する前に、まず『無量義経』を講釈し、次いで入定しました。会場では、仏陀が説法に出てくるのを人々が静かに待っていた間、皆、荘厳で静寂な心境と共に、霊山会で花や草木が微かに揺れ、花弁が地面に舞い降りる境地は、大地までもが喜びに震え、仏陀の荘厳な有り様はより心に感動を与えました。

説法瑞、入定瑞、雨華瑞、地動瑞、衆喜瑞、放光瑞という此土の六瑞に、諸仏や菩薩が衆生に説法する時の慈悲深い思いやりが込められています。説法を聴く大衆は心身共に仏法を受け入れる準備が整っており、仏陀も説法する因縁が成熟したことを知りました。

続いて、文殊菩薩と弥勒菩薩の問答で、仏陀の『法華経』講釈の幕が上がりました。文殊菩薩は過去仏で、弥勒菩薩は未来仏であり、二人による問答によって、現在仏である釈迦牟尼仏が今にも講釈を始めようとする法が、どの仏も悟りを開いた後に、必ず説法しなければならない重要な法理である証しを立てたのです。

『法華経・見宝塔品（けんほうとうほん）』の中では、多宝仏の塔が湧き出て、多宝仏と十方菩薩が仏陀の『法華経』講釈を聞きにやって来たと書かれてあります。どの仏も衆生に説法して悟りに導く時、最後には必ず『法華経』を説法しています。

多宝仏は成仏した後、説法する相手がいなくなったため、涅槃に入ってしまい、『法華経』を講釈する縁がなかったことが悔やまれました。そこで、後世で誰かが『法華経』を講釈すると、必ず多宝仏が現れて「仏仏道同」という証しを立てたため、そこからも『法華経』の重要性を知ることができます。

代々に亘る人間（じんかん）菩薩道

『法華経』の精神理念は、仏陀が成道した後、衆生に真諦の道理を話したいと思ったため、その内容は人間（じんかん）

での修行と成仏の道を説いています。時を経て色褪せることなく、現在でも通用します。私の以前からの願いとは、『法華経』を伝承することであり、二千五百年余り前に霊鷲山で説法した『法華経』の霊山会が永遠に散会せず、法華精神が永続することです。

私は慈済を創設した当初から、『法華経』を用いて道を切り開いて整え、皆を導いてきました。慈済人は『無量義経』を運用して菩薩道を歩み、『法華経』に深く入ることで、心を大きくし、仏心に近づいて来ました。『法華経』は菩薩道を教え、慈済人は慈済の志業に励んでいますが、その全ては『法華経』の精神理念の実践であり、心髄でもあるのです。

『法華経』を理解すればするほど、経文で示している道が真実の道であることが分かるため、自修することも人への応対や生活の中で使うこともでき、永遠に社会と繋がりが切れることはありません。「経典は悟りへの道なり、その道は人の進むべき道なり」と言われるように、仏法、経典は人が歩くことのできる道であり、人に体得させ、また到達させることができます。ただ成し遂げるだけでなく、心に感ずるものがあって、悟りを人々と分かち合うことで、皆にこの道は歩けることを知らせているのです。

この五、六十年来、私は『法華経』で

もって、自修し、人に修行することを教え、縁が益々成熟して来ました。慈済人がこの時代、この世で『法華経』を実践し、菩薩道に励むことは、新時代を開く重要な役目を担っています。現代科学技術が発達したことに感謝するとともに、情報伝達が便利なったことで、法を聴くのも伝えるのも、とても簡単に速くなっています。例えば、各コミュニティーで行われている読書会は、ネットを通じて参加しており、まるで空中に菩薩が集まり、直ちに法を海外に伝え、その上、傍では異なる国々の言葉を通訳して、読書会の参加者が即時に理解して仏法を体得しているのです。

仏陀が悟った真理とは、あらゆる衆生には仏性が具わっていて、凡夫と覚者の智慧は平等ですが、凡夫の心は久しく無明に覆われて来たため、業力に伴って輪廻して、ぼうっとして目覚めていません。仏法が世に栄え、より多くの人が法を護持して伝え、人心からこの世の禍を取り除くことを願っています。誰もが、「如是聞（このように聞き）、如是説（このように伝える）」のように言う）、如是傳（このように伝える）」のように、よく聞いて多く話し、導いて、絶えず人を利して啓発し、煩悩を取り除いてあげるのです。代々に亘って『法華経』の道を引き継ぎ、『法華経』の路を敷いて、この菩薩道が延々と続くことを願っています。（慈済月刊六五五期より）

無形の法理、有形の表現

「優人神鼓」の音楽総監督・黄誌群（ホワン・ジーチュン）さん（左一）は、音楽を創作し、団員を率いて、「六瑞相（六つの吉兆）」を演出した。安定感のある太鼓と銅鑼の響きは、まるで仏陀が説法を始める前の地鳴りの如く、道場を荘厳なものにした。

唐美雲さんの歌仔戯（台湾オペラ）劇団が、京崑劇団、台湾バラエティ劇団を招いて共演した。川劇の「変面（へんめん）」技法を使って、人間の「貪り、怒り、愚かさ、慢心、疑心」という五毒を表現し、ホリゾント幕に怒りを意味する炎を映し出して、五濁悪世と末法の時代を表した。

キャプション・葉子豪、陳麗安
撮影・蕭耀華　訳・常樸

生き生きとした動き 朗唱が人の心を打つ

孫翠鳳（スン・ツイフォン）芸文スタジオは、動作でもって「三車火宅」に登場する「大白牛車」を演じ、地球温暖化で、天地が火宅のようになっているこの時に、衆生が智慧のある長者の統率の下で、直ぐにでも迷いから目覚めることを訴えた。

台湾豫劇（よげき：中国の古典戯曲の一つ）の名優である王海玲（ワン・ハイリン）さん（右）は、娘の劉建華（リウ・ジエンホア）さん（左）や役者たちと共に、法華七譬（ほっけしちひ）の中の「長者窮子（ちょうじゃぐうじ）」を熱演した。豫劇に抑揚を持たせ、味わい深くて完璧な美しさを出すと共に、人物の情感を融合した歌声で、お釈迦様が慈父のように、衆生を憐れむ様子を表していた。

無量の慈悲心、愛で蒼生を潤す

仏陀は『法華経』を説き始める前に先ず『無量義経』を説いたが、劇ではその中の『徳行品』、『説法品』、『十功徳品』を演じた。菩薩が手に持った長い絹を翻す様子は、多くの微少な善の心が結集してできた大きな力を象徴し、遍く蒼生を潤す場面である。ホリゾント幕の上には五十五年前の慈済が「竹筒歳月」の習慣といって一日に五十銭を貯め、困難な中で慈善を行った映像が映し出されていた。今では慈済人がいる所には必ず「竹筒歳月」の習慣があり、小銭で大きな善行を行い、愛が地球を巡っている。

穏やかな六瑞相、敬虔な大衆

仏陀が法華経を説く前に入定して六瑞相が現れた様子。「優人神鼓」が演じた「放光瑞」は、ステージのホリゾント幕に映った光線束が、本当に釈尊の眉間から放たれた光のように見え、大鼓、銅鑼の音響がかすかに低く響く中、大衆はあたかも霊鷲山に居るように感じ、敬虔且つ静かに仏陀の説法を待っていた。

譬えを引用すれば、聞き手は信じる

『法華経』には七つの譬え話がある。今回演じたのはそのうちの「三車火宅（さんしゃかたく）」、「長者窮子」、「三草二木（さんそうにもく）」、「化城宝処（けじょうほうしょ）」、「良医病子（ろういびょうし）」である。例えば大医王があらゆる草木を薬と見なすように、仏陀はあらゆる衆生を未来仏と見なした。「優人神鼓」は、優雅な神鼓の音と共に禅の趣を持った姿で「三草二木」を演じた。「仏法が雨のようにあらゆる草木を均等に潤す」とは、衆生が機根の大きさに応じて、誰もが仏法を吸収することができるという意味である。

発心立願、法華を伝承

その格別な演劇は、慈済五十五周年に披露された。四大芸文団体と六百人の慈済ボランティアが、五月五日に荘厳な祝賀会を達成させた。静思の教えを守る弟子たちは證厳法師に、身でもって仏の教えを実証し、法華精神を永遠に伝承して行くことを発願した。

呼吸が贅沢として感じる時

世界で新型コロナウイルスの感染が再び拡大

文・顔婉婷（慈済基金会文史処スタッフ）訳・田中亜依

各国でワクチン接種が実施されているが、新型コロナウィルスはいまだ津波のように世界各地を襲っており、五月の感染者数は世界で一億五千万人を突破した。自国のことのみを考えるのではなく、相互扶助があってこそ、共にこの大災害を乗り越えることができるのだ。

二〇二〇年末、様々な新型コロナウイルスワクチンが登場し、終わりの見えないコロナ禍に一筋の光をもたらした。しかし、五カ月が過ぎた今もなお、感染が抑制されるどころか、再び急拡大している。

二〇二一年四月には、わずか三十日の間に世界の感染者は二千万人増え、死亡者数は三十万人に達した。また、チリ、カナダ、イラク、ルーマニア、フィリピンでは、感染者数が百万人を突破した。

国際的な感染拡大を背景に、台湾では五月十一日から感染源不明の陽性者が複数例報告され、市中感染のフェーズに移行した。そこから九日間のうちに国内感染者数が千二百人も増加し、台北市ならびに新北市は十五日より警戒レベル3に移行、不要不急の移動やイベント、集会などを避けるよう呼びかけた。十九日からは台湾全土で警戒レベル3に引き上げられた。

慈済基金会は防疫対策を遵守し、全国の静思堂やリサイクルステーションの対外開放を中止した。また十六日から十九日には三千五百四十五個のフェースシールドを緊急に発送し、桃園市政府、台北市警察各局（萬華、中山、内湖、南港等）、新北市警察局、宜蘭県政府に寄贈して、第一線で防疫に当たる関係者らに提供した。

市中感染が一気に拡大したことで、台湾全土に緊張が走った。国際間でも感染状況は二〇二〇年のピーク時に比べて更に厳しさが増していたが、その背景の一つにインドでの爆発的な感染拡大があった。

インドの街頭にあふれる感染者

新型コロナウィルスの第二波が津波の

ようにインドを襲った。五月の第一週だけで感染者が二百七十万人を越え、世界における感染者数の半数を占めた。累計死亡者数は二十三万人と言われたが、これは政府が公式に発表した統計数に過ぎない。

インドは今年初めからイベントの開催を緩和しており、三月は数週連続で政治活動や大型宗教イベントなどで多くの人が集まり、第二波の引き金となった。とくに十二年に一度開催される「クンブメーラ」という世界最大規模のヒンドゥー教の大祭が、一月半ばにウッタラカンド州ハリドワール市から始まり、四月二十七日まで続いた。累計参加者数は一億人を超え、さらに変異株の出現で感染が加速し、ワクチン不足も手伝って、感染が急拡大する事態となった。

現地ではニューデリーと周辺の首都圏、ムンバイ、ベンガルールなどの大都市における医療崩壊から始まり、病床、薬品、呼吸器が不足するようになった。ベッドの空きを待つことなく、病院の外で息絶える者もいた。家族らは何とかして救おうと、ベッドや酸素を求めて奔走したが、酸素は闇市で価格がつり上げられ、厳しい品薄状態になっていて、お金があっても買えない状況にあった。死亡者の数が増え続けるので、連日夜を徹して火葬場で火葬が行われたが、キャパオーバーを迎えた火葬場の外には遺体が列をなして順番を待っていた。その第二波はネパールやスリランカ、カンボジアなどの隣国にも広がった。

インドは多くの新型コロナウィルスワクチンの生産大国であり、コバックス（COVAX㊟）にとって重要な供給国でもあった。しかし感染が爆発したことで、生産速度にも影響を及ぼ

㊟コバックスは、新型コロナウイルスのワクチンの公平な分配を目指す国際的な取り組み。

●慈済はインドの神の愛の宣教者会と協力して、コルカタで貧困家庭に対して食糧など救済物資を配付した。
（写真の提供・慈済基金会）

●慈済インドネシア支部は実業家から百万セットの物資パックを結集し、５月上旬までに４５万世帯に米とマスクを配付した。ボランティアは４月にバンテン州コサンビ町サレンバランジャヤで物資券を配付し、防疫措置に留意するよう村民に促した。（撮影・クスヌル・ホティマ）

し、間接的に多くの発展途上国がワクチンを取得できない事態となり、世界的な防疫にとっては、泣き面に蜂の事態になった。インドでの感染拡大を緩和するため、各国は緊急に酸素ボンベや酸素濃縮器、ワクチンなどの医療支援を行った。

四、五月にかけて、慈済基金会の職員はインドの提携機関と連絡を密に取り合い、五月三日からは毎日打ち合わせを行って、緊急に必要な医療物資の品目や数量などを確認し、緊急調達を進め、一分一秒を争って救命物資を現地に輸送した。しかし、多くの都市がロックダウンし、国際線のフライトも欠航するなど、支援は時間との競争となった。

インドの二十八州のうち、慈済は十六の州で貧困救済を行い、今年四月十日の統計では、延べ九十四万人がその恩恵を受けた。患者が最も必要としている医療用品や医療スタッフに必須の防護装備は五月に空前の品不足になったため、インド・カミロ修道会主席のエリッカル神父はオンラインで通話した際に、同会の職員を通じてメッセージを寄せた。

「證厳法師、どうぞご安心下さい。私たちがしっかり人々の面倒を見ます。法師もお体にお気を付けください。インドの現状は皆さんには想像しがたいほどですが、私たちは教会に隔離センターを設けました。苦しむ人々がもっと支援と愛を得られるよう、私たちのために祈って下さい！」

貧困救済活動を止めたくない

インドのほか、日本やマレーシア、フィリピンなどでもコロナの感染が再拡大し

ており、政府は防疫措置を打ち出した。各国の慈済ボランティアは居住地で、「声を聴いて苦難を救う」行動をとり、政府の防疫政策の厳守を前提に、貧困層や社会的弱者、天災の被災者支援を続けている。

フィリピンでは感染者が累計百万人を越え、大マニラ都市圏における感染状況は去年よりも悪化した。慈済が予定していた三カ月の貧困救済の物資配付は、全面的な実行が難しくなったが、ボランティアは智慧を絞り、収入に限りがある視力障害者を助けようと、米や食用油など約二十キロの生活物資を提供した。密集リスクを避けるため、身障者機関が車で物資を受け取りに来たり、慈済ボランティアが家まで届けたりした。この他、ボホール島、レイテ州オルモック市などの地域に対し、三カ月の物資配付を継続した。

ラマダンはイスラム教において、一年で最も神聖な月であり、ムスリムに自律と心身浄化を実践する機会を与える期間である。今年は四月十三日からラマダンに入り、五月十三日に明けた。しかしながらアルファ変異株の世界的な流行のため、トルコでは感染者数や死亡者、重症者が激増した。感染拡大を阻止するため、政府はラマダン前後において全面的に、最も厳格なロックダウンによる防疫対策を取り、あらゆる職場での活動が停止したため、トルコ国内に居住するシリア難民の家庭は、生計に大きなダメージを受けた。慈済ボランティアはスルタンガジ市の約四千三百世帯、アルナブトコイ地区の約千三百世帯に対し、カード一枚あたり百トルコリラと同等の価値を持つ物資カードを各家庭に四枚ずつ配付し、ムスリム家庭が食事に困らず、安心してラマダンを過ごせるよう支援した。

アメリカにおけるコロナウィルスの感染状況は最も酷く、感染者数は世界最多であったが、去年十二月中旬からワクチン接種を開始してから、感染拡大は落ち着きを見せた。政府は多くの大型ワクチン接種会場を設け、市民は英語のウェブサイトで予約をし、さらに会場では数時間並んで順番を待つことを強いられた。慈済のアメリカ医療基金会と慈済人医会は、多くのワクチン接種会場を設置して早急にワクチン接種を支援すると共に、ボランティアが英語の分からない

移民をサポートした。移動医療チームはカリフォルニア州のセントラル・バレーに赴き、農業に従事する外国人労働者に接種を行った。医療保険がなく、都市部への交通手段がない彼らは、ワクチン接種を終えるとロトにでも当たったかのように喜んだ。

中南米では、アルゼンチンで一日に二万七千人が感染し、累計感染者数は三百万人を突破した。ブラジルは感染拡大が悪化の一途をたどり、感染力の強い変異株「P1」が既に南米各地に広がり、各国にとって最大の懸念であり脅威となっている。

ブラジルのフォス・ド・イグアス市にある特殊境遇家庭子女の友協会は、心に障害を持つ人を対象にした教育センターだが、元々このセンターに食糧支援を行っていた機関が続けられなくなったため、協会は慈済に支援を求めた。一本の橋を隔てたパラグアイのシウダード・デル・エステ市に住む慈済ボランティアは四月、差し迫った危機に対応して、二十一キログラムの食品と三・六リットルの油を含む食料バスケットを百セット、緊急で支援した。

パラグアイのシウダード・デル・エステ市の公立病院の裏手にはコロナウィルス専門の治療センターがあるが、疲弊した貧しい家族らは家に帰って食事を作ることもできず、近隣の福祉施設「サグラダファミリア」が彼らの拠り所となって、慈済ボランティアは食材を提供した。また、公立病院に医療防疫物資を寄贈するなど、第一線で戦う医療スタッフをサポートした。

チリは今年三月下旬に国民の半数近くがワクチン接種を終えたが、感染者数は

●チリでは多くの家庭が失業で収入を失った。ラ・グランハでは400世帯が慈済の支援を受けた。ボランティアが食用油を、市民が持参したエコバッグに入れていた。（写真提供・慈済チリ・サンティアゴ連絡事務所）

再び増加し、一日に七千人を超え、政府は再度ロックダウンを実施し、四月には国境を封鎖した。慈済ボランティアは、失業で給与収入がなくなって、食べ物に困っている貧困世帯を思いやり、様々な方法を考えて、ラ・グランハ市で物資の配付を行い、困っていた四百世帯を支援した。

アルゼンチンでは、ボランティアが遠く二千キロ以上離れた南部の森林火災エリアに駆け付け、被災世帯を支援した。四月にはロックダウンが実施される前にマスク、建材、物資券などを配付した。イタリアではボランティアがマスクなどの物資を寄付して赤十字の防疫をサポートした。エクアドルでは、慈済ボランティアが引き続き貧困家庭に食糧を配付し、マレーシアのクランタン州にある隔離センターでは病床数が切迫したため、慈済ボランティアが簡易折り畳みベッドを提供し、州政府をサポートして低リスク隔離センターを設立した。慈済は有形の物資を支援するだけでなく、人々に無形のパワーをもたらし、人々の暗い気持ちが変わり、愛を啓発し、依然終わりの見えないコロナの苦境の中で、自分を救ってから周りの人を助けることができることを願っている。

（慈済月刊六五五期より）

国際慈善

二つのサイクロンに襲われたモザンビーク
慈済チームが自発的に集結

文・龍嘉文（慈済人医会医師）　訳・田中亞依

モザンビークの大統領はメディアを通じて、まもなく上陸するサイクロンに警戒するよう国民に呼びかけた。しかし、携帯電話はおろかラジオやテレビもない貧しい市民たちにはこのメッセージが届かないことを慈済ボランティアは知っていた。そこで、ボランティアたちは即座に互いに連絡を取り合い、災害後に訓練した通りに動員し、被災状況の調査と同時に炊き出しと物資を配付することを確認した。このような緊急災害支援の経験は二年前のサイクロン・イダイに遡る……。

二〇一九年、大型サイクロン・イダイとケネスが立て続けにアフリカを襲い、モザンビーク、ジンバブエ、マラウイなどの国に甚大な被害をもたらした。サイクロン・イダイによる被害を、国連のグテーレス事務総長は、「アフリ

カ史上最も大きな自然災害の一つ」と表現した。

二〇二一年初め、国際的なドイツの環境NGO、ジャーマン・ウオッチが発表した「世界気候リスク指数」によれば、モザンビークは気候リスクランキングで一位となっており、その地理的条件と国全体の貧困度合いから、気候変動がもたらす影響がさらに深刻になると予測している。

二〇二一年一月、モザンビーク中部のソファラ省はサイクロン・イダイに続いて再度大きな被害を受けた。三週間のうちにサイクロン・シャレーン、サイクロン・エロイーズが続けて中部地域を襲い、甚大な水害をもたらした。復興中のソファラ省では、ウィルスの感染拡大で大きな影響を受けている人々の生活に自然災害が重なり、何重もの打撃に耐えかねている。

集落に入り、早めに災害に備える

二〇二〇年十二月二十八日、モザンビークのフィリペ大統領はメディアを通じ、一級サイクロン・シャレーンがまもなく中部に上陸すると警告を発し、警戒を強めて災害に備えるよう国民に呼びかけた。サイクロン・イダイによる甚大な被害を経験している中部の慈済ボランティアには、携帯電話はおろか、ラジオやテレビも持たない貧しい市民たちにはこのメッセージが届かないことが分かっていた。彼らはすぐに家庭訪問やインターネット、携帯電話などあらゆる方法を使って情報を流し、早めに被害に備えた。

ボランティアたちは徒歩で集落を訪れ、サイクロンがまもなく上陸することを口伝えして回った。暴風雨に対して、粗末な草葺きの家に住んでいる人々は屋根が吹き飛ばされることを一番に心配し、サイクロンが来る前に精一杯屋根を固定した。若いボランティアたちがお年寄りを手伝って、大きな石や木材を探して来て、屋根の重しにした。メトゥチラ町では、ボランティアが倉庫に回収した愛心米の空袋が余っていることを思い出し、急いで各家庭に五枚ずつ配り、それで土嚢を作ってもらった。田舎では物資に限りがあるため、米袋を裂いて縄の代わりにし、それで屋根を縛って固定するなど、様々なアイディアを出し合った。

サイクロン・シャレーンは移動スピードが速く、わずか二十四時間風雨が吹き荒れただけだが、中部地域で死者七人、

被災者十三万人の被害が出た。首都マプトの慈済ボランティアであるディノさんと蔡岱霖（ツァイ・ダイリン）さんたちは、急いで千キロ離れた中部の被災地域に向かい、三千世帯を超す避難中の人々が帰宅後すぐに家の再建に取りかかれるよう、三週間のうちに白米や建材・食糧セットを配付し終えた。

住民たちが喜びと共に物資を受け取って帰宅し、マプトのボランティアたちが支援を終えて中部を離れた数日後、サイクロン・エロイーズが来襲した。一月二十三日に中部に上陸し、暴風が吹き荒れ、一日に二百五十ミリの降水量を記録した。水が引いたばかりの中部に災害が重なり、二十一万人以上が被災した。

立て続けにサイクロンに襲われたが、ボランティアたちの被害調査や支援活動が滞ることはなかった。風雨が過ぎた後、二年前にサイクロン・イダイの被害を受けたニャマタンダ郡の若い地元のボランティアらが、衛生環境の劣悪な被災地に入り、糞尿も混ざった汚水の中を歩いて被害調査を行なった。

二十三歳のソアレスさんは、今は慈済ボランティアである。早くに両親を亡くした彼は祖母に育てられた。家庭が貧しいため、学校を退学し、毎日水を運んだり、売ったりして家計を助けていた。若くて体力があったため、毎日四百リットルの水を運び、約二百メティカル（約二百五十円）の収入を得て、祖母と二人でどうにか暮らしていた。二年前、ソアレスさんの家がサイクロン・イダイの被害に遭って倒壊し、なす術がなかった時に支援にきた慈済人に出会った。イダイによって家が倒壊したことが、彼の人生を変えるきっかけとなった。

「慈済に参加する前は、感謝を知らない自分中心の若者でした。しかし、證厳

●サイクロン・エロイーズによる被害で、ニャマタンダ郡ティカ村など低地では冠水が引かず、慈済のボランティアは水の中を歩いて被害状況の調査と避難所の視察を行った。（撮影・ソアレス・ジョアキム・サントス）

法師の大愛精神に感動し、自分の殻を破ってより貧しく苦しんでいる人たちに手を差し伸べることを学びました。慈済のおかげで、学校に戻って学ぶことができ、さらに撮影技術も習得できました。とても感謝しています」。

この二年来、ソアレスさんはマプトのボランティアと共に家庭訪問を行い、インタビューや記録、パソコンの使い方を学んだ。サイクロン・エロイーズが現地に与えた影響は甚大で、彼は写真を通して世界にありのままの現状を知ってほしいと考えた。被害状況を調査した時、冠水していて、病気を媒介する蚊の繁殖により、彼ともう一人のボランティアはマラリアに感染したが、彼は薬を飲んで一日休むと、再び撮影を続けた。

「私は早くマラリアを克服しなければならないと自分の体に言い聞かせました。そうでなければ、世界はモザンビークが直面している被害状況を知ることができないからです」。困難な中で撮影した画像は、ボランティアたちを感動させた。ソアレスさんは、地元のボランティアが懸命にアフリカを変えようとしていることを證厳法師に知ってほしいと言った。

●ブジ郡グアラグアラ村の避難所は食糧不足が深刻で、ボランティアは被害状況を調査した後、すぐに炊き出しを行った。サイクロン・エロイーズによる災害の後、2郡3カ所の避難所で食事を提供した。（撮影・ダリオ・ニャカレ）

炊き出しに老若男女も安心してお腹を満たす

深刻な被害を受けた中部のニャマタンダ郡ティカ村やブジ郡グアラグアラ村には緊急避難所が設置され、それぞれ約二千人と約一万人の避難者を受け入れたが、それを上回る避難者が集まって入りきれず、テントも足りなかったため、野宿を強いられる人も数多くいた。政府は資金不足で食糧が不足し、一日一食で何

とか過ごすしかなかった。

灼熱の天気に加え、資源に限りがあったため、避難所での生活はきびしく、密集した状況下でもマスクをした人は殆どいなかったため、コロナウィルスの感染リスクが増大した。住民はあわてて避難したため、財産は何一つなく、ある家庭は一家七人で一皿のコーンミールしか受け取れなかった。また、ある人は列に並んだ挙句、大鍋の底に残ったお焦げを無気力に見て、「今日もお腹を空かすしかないようだ」と子供に言った。ボランティアから次々と送られてきた災害現場の映像を見ると、住民たちのつらさが身に染みて感じられた。

一月二十八日、サイクロン・エロイーズが去ってから五日後、ティカ村の避難所の大樹の下はガヤガヤと賑わっていた。大鍋に煮込まれた主食のコーンミールと大豆のおかずが幾つもの容器に入れられた。慈済ボランティアの一日目の炊き出しの様子である。彼らは連日食材を購入して、避難所で食事の提供や調理の手伝いを始め、民衆が配付会場の外に並んで待っていた。住民たち一人ひとりに、ボランティアがステンレス製の皿やプラスチックカップ、スプーン、繰り返し使える布マスクを配った。

一人につき一セットの食器類は、遠く離れた花蓮の法師が被災状況を知った時、第一線で支援を行うボランティアに、必ず一人ひとりがきちんと食事を取れるようにと指示したものである。

災害に加えてコロナ禍で一万セット近い食器類や物資を集めるのは、ボランティアにとって非常に大きな挑戦だった。慈済は今回の風災でも、最初に食事や物資を配付したＮＧＯであった。ある住民はインタビューで、ボランティアが食器を配ってくれたことに感謝した。「これまでは食器が一つしかなかったので、家族の代表が並び、受け取った食事を家

族全員で分け合って食べていました。食べ終わって再び並んだ時は、もう食べ物は残っていないということがよくありました」。今は皆がマスクを着け、自分の皿を持って、整然と並び、炊き出しの量も十分にあるため、ようやく自分の番が来るまで食べ物が残っているかどうかを心配する必要がなくなった。

一月はちょうど雨季にあたり、中部は何日も雨が続いたため、低地では水が引かなかった。被災後一カ月以上経っても、慈済ボランティアは被災者を支援し、簡単な温かい食事は、ティカ村とグアラグアラ村の合計一万二千人余りの住民に安心と満腹感を与えた。

ずっしりと重い物資を手に 家で再起の扉を開く

物資を満載したトラックが、ゆっくりとティカ村ムタムレガ小学校の避難所に入ってきた。木の下にいた老若男女は拍手と歓声、歌と踊りでボランティアたちの到着を迎えた。

慈済は一月二十八日から炊き出しを始めると同時に、家屋等の再建を支援するため、食糧や建材、工具、種の購入も行った。二月中旬に、政府が避難所を閉鎖し、住民たちを帰宅させることを知って、ボランティアはすでに用意していた「建材、種、食糧生活パック」を二

月十六日の早朝、避難所に届けた。

「慈済が四百七十九世帯に物資を配付して、彼らの帰宅を祝います！」と現地ボランティアのナジラさんが説明した。各世帯に、建材と一カ月分のコーンミール、大豆、塩、砂糖、油などの食糧が配付された。また、農作物が洪水で流されたことを考慮してカボチャやキャベツ、ゴマなどの作物の種も用意し、住民たちが徐々に生活を取り戻せるようにした。数週間の避難生活を経て、耕作を楽しみ

●ボランティアは避難所で食器セットを配付した。ティカ村の避難所で民衆が自分の食器を持ち、食事を受け取っていた。（撮影・ルイサ・シェイラドス・サントス・シャンバラ）

にしていた住民のロッサさんは、「農作物による収入があれば、日用品を買うことができます。本当に感謝しています！」と話した。

ニャマタンダ郡郡長のホセ・トメさんは、現地の住民は農業で生計を立てており、被災後に最も必要なものは住居と食糧、種であると説明した。「三週間のうちにシャレーンとエロイーズ、二つのサイクロンに襲われましたが、慈済の物資は非常に大きな助けとなり、特に今日配付された種で、人々は自力更生することができ、生活が少しは安定するようになります」。

配付セレモニーが始まろうとした時、一人の妊婦が、もうすぐ生まれそうなので先に物資を貰えないかとボランティアに頼んだ。ボランティアは急いで物資を渡したが、セレモニー終了後、その女性の安否が気に掛かったため、近くの診療所に様子を見に行き、彼女が無事出産したことを知った。おくるみに包まれた赤ちゃんは彼女の三人目の子供だった。

赤ちゃんの母親、フィリスミナさんは、慈済が適時に物資を配付してくれたことに感謝し、子供に「マリアノ・ツーチー・ホセ」と名付けた。現地では、ミドルネームは敬意を表する意味があり、大切な人を記念して名付けることがよくあるそうだ。

母子はボランティアに付き添われて、ティカ村郊外の荒野にある家に帰った。彼女の一家は五人で、葦と泥で作った粗末な家に住んでおり、連日の雨で室内にも水が溜まっていた。ガランとした家の中にはベッドもなく、土が乾くまで座って寝るしかない。見るに忍びなかったボランティアは、一緒に家を掃除すると共に、直ぐに折り畳み式ベッドと毛布、ベビー用品を届けた。

マプト慈済支部の職員二人は、同胞の困難な暮らしを目の当たりにして、ショックと共に忍びなく思い、自腹を切ってマリアノちゃん一家のために部屋を借りてあげた。この話が広まると、ニャマタンダ郡にあるホテルのオーナーが、フィリスミナさん一家の自立を助けるために仕事を紹介したいと、自主的に慈済に連絡してきた。

三月中旬の時点で、まだ一万人以上が帰宅できず、避難生活を余儀なくされていた。慈済ボランティアは建材、種、食糧生活パックを提供して家庭の再建を手助けする計画を立てた。その後もティカ村、ラメゴ村、ニャマタンダ郡、メティチュラ村など約四千世帯の二万人に三カ月間の食糧支援をする。それが、最前線を行き、最後まで寄り添うという慈善精神であり、苦難に喘ぐ人々を守っているのである。（慈済月刊六五三期より）

新書のすすめ・『どの瞬間も良い時』

山を乗り越えてから

文、絵・凌阿板　訳・荳荳

この本を読んでくださっているあなたに感謝したい
ここから何かを得られるものがあれば、本当に嬉しい
私が困惑の中で体得しながら心田を耕してきた過程がここにあり、
私は素晴らしい結果を得ることができたのだから。

数日前、偶然にも大学時代の慈青の巧如（チァオルー）先輩が娘さんの樂樂（ローロー）ちゃんを連れてきた。一緒に遊んだり、お絵描きしたりして、とても楽しい時間を過ごした。その後、巧如先輩からメッセージが来て、別れ際の私の後ろ姿で、私が花蓮の静思精舎に出発する前に会った後の後ろ姿を思い出したそうだ。

それがきっかけで、私も色々思い出したことがある。

あの時はすごく緊張していた。これから山の向こう側にある花蓮に行くけれど、どうなるのか何も分からなかった。それでも心の中では何かが私を呼んでいるのを感じていた。山麓の精舎での生活は、すでに七年になる。

巧如先輩に聞いた。今回、彼女が見た私の背中は、成長したのだろうかと。しかし直ぐに、子どものままで居たいけど、と付け加えた。

ある出版社の黄靖雅（ホワン・ジンヤー）さんがこう書いていた。「たとえ一日八時間勤務して、混雑した電車やバスで往復二、三時間の通勤時間を掛けても、残りの時間は親や子供の世話をしなければならず、自分の人生は、『山居法』（チベット仏教の修行用書）とはまだ程遠いと感じた。それは、諦めず、心の中にあるその山を守る意志があれば、たとえどんなに苦労しても、自由に対する情熱を持ち、利他する自信を失わなければ、どこに居ようと、あなたの山と洞窟はそこにあるのだ。何時どこでも、狭い空間に何時もその山は存在している。そこで修行しなさい！」と書いている。

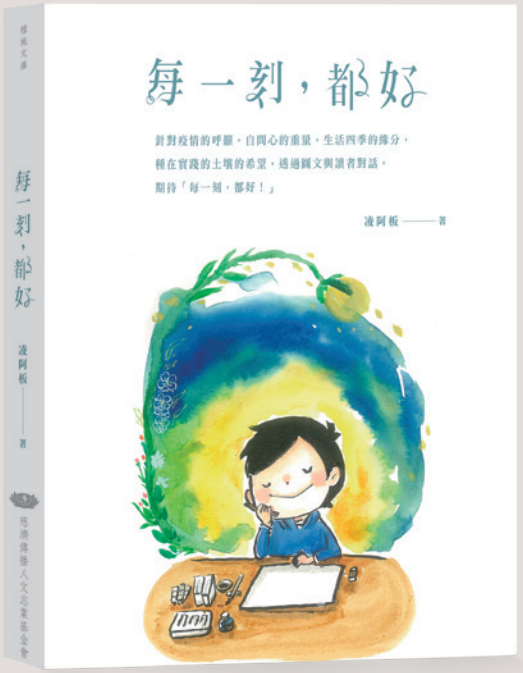
その山を乗り越えた時、心の中に超えなければならない山があることを知り、益々仏が言ったことが理解できるように

なるのだ。「霊山を遠くに求むるなかれ、霊山は汝の心の中にあり、人みな心に霊山あり、いざ霊山のもとに修行せん」。私はそこから出発した。再び戻って来て、「私は大丈夫、頑張り続ける。初心は忘れてはいない」と言いたい。きっと、まだ笑顔になれる限り、私は忘れていないのだと思う。

毎日が素敵な日々

以前は絵や文字で本を出版することなど想像したこともなかったが、思いも寄らず成し遂げることができた。しかも二冊目である。證厳法師曰く、自分で福田を耕せば、自分で福縁が得られる、と。この本を読んでいるあなたに感謝を伝えたい。そこから何か得られるものがあれば、本当に嬉しい。私が困惑の中で体得しながら心田を耕してきた過程がここにあり、私は素晴らしい結果を得ることができたのだから。

證厳法師から頂いた言葉や今まで経験してきたこと、そして、あなたたち一人ひとりが平凡な毎日を素敵で意義のあるものにさせてくれたことに感謝したい。何か行動すれば、必ず何かが残り、過ぎた縁が積もって今の収穫になっている。皆といつまでも深い縁で結ばれていることを願っている。



出版：**檀施文庫**
連絡先：02-28989000内線2145

「慈濟道侶檀施會」へのご協力を歓迎しています。オンラインで参加すると隔月で一冊の本をお届けします！

心を護る

コロナ禍が始まったばかりの頃、ある文章を目にした。日本のある小さな町でマスクが品切れになり、店員が、空になった棚に張り紙をした、「やまない雨はない、必ず晴れる。うばい合えば足らず、わけ合えばあまる」。

コロナ禍で、マイ箸やハンカチ以外、マスクは誰もが肌身離さず携帯するものとなった。マスクは目に見えない細菌から身を守るが、心はどうなのだろう。

ふと、「悲」という字の慈済手話（慈済が経典劇で用いる表現方法）を思い出した。その形はマスクにとても似ている。皆が慈悲心を持っているため、人々は辛くても奉仕することを厭わず、医療関係者であれ、ボランティアであれ、体を使って実践しているのだ。

個人的に慈悲心を振り返ってみる。何かできることはあるだろうか。菜食するのも一種の方法ではないかと思う。コロナ関連のニュースを見ると、動物の苦しみが感じられ、今は、私たち人類がその苦しみを受けているように思う。

感謝することを学び、愛を受け入れ、奉仕すれば、人に温かさを与えると同時に、自分を強くすることもできるのだ。

善の因を植え付ける

法師はこう開示した。「皆さんに感謝します。あなた方が法の伝承をしてくれているからです。因は種であり、因があることで縁ができるからです。ですから感謝の気持ちを心に銘じているのです。あなた方がいるから、私がここまで来られたのです」。

帰郷して母と妹の勉強について話し合った時、我慢できずに、「以前、私が広報デザインを学びたかったのに、母さんが反対するから…」と言ってしまった。母は「そんなことがあったかしら。ごめんなさいね。その時はお絵描きじゃ食べていける気がしなかったものだから」と言った。

言ってしまった瞬間、母に感謝すべきだったと思った。母がいなければ、大学で慈青のサークルに入っていなかったかもしれないし、多くの良い友人ができて、卒業後にまた静思精舎に来て仕事していなかったかもしれないからだ。

あらゆる出来事にはそれなりの因果関係があり、喜怒哀楽で人生の路を切り開いてきたから、今の私があるのだ。何かが起こった時、思うようにいかなくても、感謝の気持ちを持てば、善の「因」が植えつけられ、何時かそれが芽を出して、お互いに支え合う縁になるのである。

日々の菩薩の十地

どのようにして生活の中に仏教の教えを見えるようにすることができるか？
一瞬閃いて、毎日の生活に「菩薩十地㊟」を感じた。
朝起床する時、一日の始まりに感謝し、喜びの気持ちに溢れるのが「歓喜地」。
起床した後、自分をきれいにすることが「離垢地」。
朝の会でお諭しを聞いて法の香りに浸った後、輝くように一日を始めるのが「発光地」。
情熱を持って人に接し、智慧を使い、菜食とエコな生活ができるのが「焔慧地」。
困難に直面した時、一人で解決することはできなくても、
大勢の人の力が結集して、周りの善き友と共に乗り越えるのが「難勝地」。
どんな心境になろうと、常に今この瞬間に集中し、
前に向かって進むのが「現前地」。

㊟十地とは、菩薩が修行しなければならない五十二段階のうちの、四十一位から五十位にあたる。

歓喜地（かんぎじ）
楽しい気分で起床する。

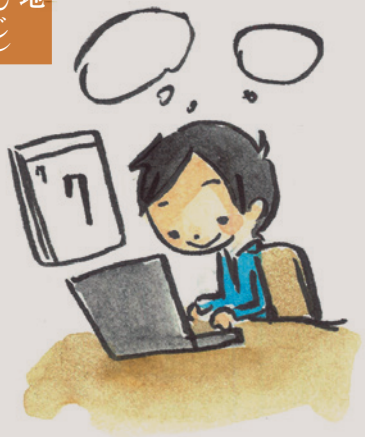
離垢地（りくじ）
自分を清潔にする。

焔慧地（えんえじ）
情熱を持って人に接し、賢く生きる。

発光地（はっこうじ）
輝くように一日を始める。

難勝地（なんしょうじ）
生活における困難を乗り越えると共に周りの恩を忘れないこと。

現前地（げんぜんじ）
今に集中し、未来を見据える



人が困難に出会っている時、助けに行くのが「遠行地」。
人を助け、褒められた時、自分の本分だと思い、
それによって傲慢にならないのが「不動地」。
見返りを求めず、適時適所で奉仕し、智慧でもって善行に向かうのが「善慧地」。
一日の終了と共に、空を見上げ、法喜を以てその日を過ごし、執着心を持たず、
雲のように「真空妙有」になるのが「法雲地」。（『どの瞬間も良い時』から引用）

遠行地（えんぎょうじ）
遠方で助けを求めていたら、直ぐに助けに行くこと！

不動地（ふどうじ）
人に褒められても傲慢にならない。

法雲地（ほううんじ）
一日が終われば、空を見上げ、法喜と共に帰宅する。

善慧地（ぜんえじ）
智慧で善行に導く。

（慈済月刊六五三期より）

【證厳法師のお諭し】

天から任された重責を皆で担う

◎訳・慈願　絵・林順雄

一人でも多くの人が愛の心を尽くせば、
それだけ力は大きくなります。
一人一人が時代の重責を担うことで、
この世紀の疫病の荒波の中でも
人々の苦難を一変させることができます。

この世紀の新型コロナウイルスの蔓延に一年以上も向き合っていますが、人々の心に残る無念さ、憂いは言葉で言い表すことができません。

この時期に台湾の医療人員は大変重い責任を担い、分秒を争って貴い命を救っています。毎朝行われる慈済医療志業との会議では、各病院の医療スタッフが自分を顧みず、貴い命と愛を護ろうとしている姿に感動すると共に感謝しています。皆、疲れ切っていると思いますが、人々の健康のために、引き続き努力して重責を担っています。

医療スタッフは、職業の使命と家庭の平穏を両立させています。仕事に打ち込めば、感染することを恐れるため、何日も続けて家には帰りません。彼らが身につける何重もの防護装備は、頭から顔、体を密封するため、空気が通らないばかりか、水を飲むのも困難です。

医療スタッフはまるで鎧を身にまとった戦士か大将のように、兵士を引き連

れてウイルスという大敵と戦っています。ウイルスは目に見えず、触ることもできないため、完璧に防護するだけでなく、愛の心で患者を安心させています。私は毎日、各院長たちに、医療スタッフは患者を護る前に自分を護るようにと注意を促し、私の代わりに病院のスタッフを護り、感謝の言葉を伝えてくれるようお願いしています。

志を守って道に身を奉じ、勇敢に担っている医療スタッフを何より大切に思っております。ですから、私たち自身のスタッフを思いやるだけでなく、台湾のあらゆる医療機関に関心を寄せ、防護物資を必要とする時は、世界中の慈済人が心を一つにして支援しています。慈済の四大志業は既に一斉に動き始めています。医療志業は感染患者の苦しみと恐怖心を優しく思いやり、慈善志業は各地の医療志業の後ろ盾となっています。また、教育志業と医療志業は切っても切れない関係にあり、心して資源を統合し、関連薬剤の研究開発に努めています。人文志業は真実を正しく報道して、人心の安定に努め、大衆に正しい予防方法を理解してもらうと同時に、敬虔に菜食し、それが健康への道であり、防疫にもなることを呼びかけています。

益々高まる感染拡大に対して、恐れ慄いても仕方なく、それよりも戒慎し、敬虔になることです。自分の生活や行動が欲望のためだったのかどうかを反省し、心から目覚めて、殺生を戒め、斎戒して敬虔な心を表しましょう。人間は肉食しなければ生きて行けないことはありません。動物には動物の世界があり，互いに領域を侵さず、共生共存してこそ、調和のとれた天地となるのです。もし、生命を殺めて自分の口の欲を満足させることが当然だと考えているならば、その殺生が業を造り、秩序を乱し、衆生の共業となり、その逆襲の力は怒涛の津波のように、抵抗し難いものになります。

動物の体には多くの病原体が潜んでいるため、それを口に入れないことが最も効果的な防疫なのです。菜食でも充分な栄養があり、清潔で汚染されてなく、安心して食べることができます。誰もが一言でもよい話をすれば、口の徳が一つ増えるように、生霊の肉を一口でも食べなければ、口の徳がまた一つ増えることになります。一人一人が菜食をすることは、一食で多くの生き物を放生することになり、無量の功徳

を成就させることになるのです。

誰もが影響力を発揮することができます。ネット上で指を一本動かすだけで、菜食に関する情報が送り出され、一秒で世に伝えられて、世界中の人がその場で斎戒して、福を造ることができます。誠心誠意、人と菜食の道理を分かち合えば、心から納得して貰え、一日三食を安心して食べることができるようになります。

このコロナ禍では、医療に関わる人全てが、心して仕事に投入することで、大いなる無畏施㊟の実践をしていると言えます。また、社会を守る警察官と消防士に対しても、より一層相手の気持ちになって、思いやりと尊敬の念を持つべきです。感染防止は第一線だけではありません。「天の将に大任を斯(こ)の人に降さんとするや」という言葉がありますが、この人とはあなたのことであり、私のこと、皆んなのことであり、コロナ禍の中では、誰もがこの時代の「大任」を担う責任があるのです。そして、この世に尽くし、発心立願して人間(じんかん)の苦難を覆す菩薩となるのです。一人でも多くの人が愛を奉仕すれば、それだけ福は多くなります。一人一人が愛に富むようになれば、この世も大きな福に包まれ、災難をなくすことができるのです。

あらゆる慈済人に感謝しています。私の話をよく聞いて寄り添い、心から責務を担って投入し、奉仕することに期待しています。世の人の愛を結集して最も緊急で苦しんでいる人を助けてくれていることで、私の肩の重荷は軽くなります。フィリピンの貧困者が慈済の支援を受けた時、所持金が小銭一つであっても、それを人助けの為に差し出した姿を目の当たりにしました。人々が自分相応の奉仕をするのが、この世の美しさです。その美しさは人々の病苦を知って、富める心で喜んで奉仕し、相手が救われたことを見た喜びです。僅かな布施が漏れずに集まれば、愛のエネルギーはもっと密度の濃いものになります。

今回の感染症は「大いなる教育」だと言えます。人類は今、道理を聞くだけでなく、その道理を行動に移すべきだと教えているのです。生命は正にひと呼吸の間にあり、今生のあらゆる時間を有意義に使い、縁を把握して重責を担い、天下の善行を成し遂げるべきです。自ら善法を実践し、人々を善行に導くのです。皆さん、心して励んでください。(慈済月刊六五六期より)

㊟無畏施：三施の一つ。人に畏れの念を起こさせず、恐怖心を取り除くこと。

慈済の創設記念日

寿桃に秘められたソフトパワー

三種類の中華まん生地を最高比率で混ぜ合わせ、それを繰り返し揉み推しした後に形を整えて発酵させ、高温で蒸し、凹みを付けて色付けします。そうすると見た目が綺麗で、口当たりが柔らかくて、コシの強い寿桃（誕生祝い用の桃型まんじゅう）が出来上がります。それは修行での様々な鍛錬のように、柔軟（にゅうなん）な心を磨き上げますが、ソフトパワーを表してこそ、人々に愛され、広く良縁を結ぶことができるのです。

文、撮影・釋德澡　訳・惟明

慈済の創設記念日を迎える度に、寿桃を作ることが静思精舎の一大行事になっています。

今年は慈済創設五十五週年です。三月末、各地から集まったボランティアや会員は、心の故郷に戻って「朝山」参拝をしました。四月八日からは精舎の常住尼僧と高雄の方漢武（フォン・ハンウー）師兄が率いる寿桃作りのチームが、連続十五日間にわたって十三万個近い寿桃を作りました。それは参拝者に縁結びの品として贈呈される他、各志業の職員に贈られたり、五月五日の慈済五十五周年当日の記念品としました。純白のベースに淡い桃色の寿桃は、證厳法師と常住尼僧たち及び全世界の慈済ボランティアの愛と感謝、祝福の気持ちが込められています。一つひとつが「福」と「慧」であり、寿桃への愛しさは止まりません。「とっても荘厳で、綺麗！食べるのが惜しいです」。

寿桃作りの過程は煩雑です。小麦粉、油、塩、砂糖、氷水の他、酵母菌も欠かせない材料です。精舎の寿桃作りを任さ

●静思精舎で作られた13万個の寿桃。製作の全過程で心し、無量の祝福が込められている。

れて十二年になる方さんによると「必要な材料は一つも欠かせません。これは因と縁の融合です」。それは慈済人が、学歴、社会的地位、経済力を問わずに、皆が心を合わせ、仲良く、互いに愛しみ合い、協力し合い、それぞれの立場で本分を尽くし、能力を発揮するようなものです。それこそ、真善美である慈済世界なのです。

チーム中のメンバーは色々な職業の人で、大半は寿桃作りに関して素人ですが、大衆と良縁を結びたい一心で喜んで作っています。参加者の中には、「場所」を取られないようにするため、我慢して手洗いに行かない、という人もいました。「人が多いと、『治安』も悪くなります。ちょっと作業場から離れて戻ると、その場所には他の人が『立ったり』、『座ったり』しているのです」。「心して繰り返し学べば、慣れて来て上手になり、素人も玄人になれます」と方さんが褒めました。確かに、人には無限の可能性が秘められているのです。

柔らかくて歯ごたえがあり、コシが強い。丁度良い加減が最高

寿桃作りにあたって、三種類の生地を丁度よく混ぜ合わせる必要があります。それらは、四十八時間発酵させた風味の強い完全熟成生地と十二時間発酵させたコシの強い半熟成生地、そして中継ぎの役割を果たす未熟成生地です。それらを合わせるのは、生地それぞれの役割があるからです。「それは、慈済世界が老年、中年、若年ボランティアによって成り立っているようなもので、高齢者を世話し、中年者が担い、若年者を囲い込むのです」と方さんが言いました。三者一体になれば、慈済のソフトパワーで、社会にもっと大きな貢献ができるのです。

どうして氷水を使うのかというと、酵母菌を暫く眠らせ、適切な時間と場所で効能を発揮してもらうのです。もし、桃の形にする前から発酵が始まれば、完成品のコシの強さと密度が不均等になり、モチモチした口当たりが得られなくなります。

誰でも簡単にマスターできるように、方さんは製作過程をマニュアル化しました。人の役割分担については、「適材適所で、各々の習性と特長に合った作業場に就かせることで、その能力が発揮でき、やり甲斐を感じてもらうことができるのです」と方さんが言いました。それは、氷水と酵母菌が適切な時間と場所に現れ

れば、寿桃の品質が明確に違って来るのと同じです。

中道は、仕事や身の処し方における最良の方法です。三種類の生地を一つに混ぜ合わせる過程は中道を選び、行き過ぎも不足も円満ではありません。攪拌は緩慢の組み合わせで、時間を上手く捉えれば、生地は柔らかくてモチモチ感が出て来ます。

生地を高速のプレス機に通した後、十四回繰り返し捏ねることで空気を押し出し、程よい弾力性とふわふわでしっとりした食感が生まれます。また同時に、生地表面のざらざらを滑らかにする重要なポイントです。なぜ十四回かというと、やはりそれが中道なのです。多すぎると固くなり、不足すれば水っぽくなって、しまらなくなるのです。

寿桃作りのそれぞれの工程で、生活の中の禅が見てとれます。高速回転する生地を十四回繰り返し、それを落とさず受け取れるのも禅定の修行です。人は群衆の中で鍛え抜かれて、性格が丸くなります。その過程は辛いものですが、痛みを感じて不純物がなくなれば、柔軟な心が磨き出され、常に人と良縁を結び、人に愛されるようになります。

続いて、生地を均等な重さの寿桃にするには、もう一つ秘密兵器があります。三十六等分に分けられる裁ち切り板です。方さんは證厳法師の「慈悲等観」という理念に基づいて「どれも同じ大きさになる」ようにそれを設計しました。桃の形に作る時、餡が偏らずに真ん中に来るようにしなければなりません。そして焦らず、心して真摯な態度で、しっかりと餡を生地に包み込みます。生地をしっかり閉じないと餡が露出してしまい、「桃太郎」（淘汰と桃太は中国語では同じ発音）となって淘汰しなければならなくなります。それでは、それまでの努力が無駄になります。

人によって握り方が違うので、桃の形も違ってきます。人も同じで、体格も顔つきも習性も異なりますが、目標は皆同じで、善に向かって進めば、社会は平和なものになります。

美善の環境が良い世界をもたらす

酵母菌を目覚めさせるために、形を整えた寿桃は四十度前後の環境に寝かせ、発酵させて膨らんでから、蒸し器の百度の温度に鍛えられるようになります。これで荘厳な見栄えになった後、包装の工程に入り、そこで縁のある人と良縁で結ばれるのを待ちます。

寿桃製作チームのメンバーの一人である高雄の黄明朝（ホワン・ミンツァオ）さんは、三十九歳になるまでは統率力のある地域のボス的な存在で、質屋を経営

しながら、暴力による借金の取りたてもしていました。「以前はやっていけないことを沢山やりました。私は単純な生活に戻りたかったのですが、現実の環境が勝手にさせてくれませんでした」。黄さんは精神の導師である證厳法師に出会い、良知が喚起され、人生の方向と意義を見つめ直しました。それをきっかけに、彼は毅然と全ての事業を畳み、慈済に専念することにしました。「今の私は心配や不安がなくなり、単純で自在な生活を送っています」。

寿桃が誰にも好かれるようになるか否かは環境の力が左右します。適切な温度で発酵させてから蒸し器に入れて試練を与えます。人間も同じことが言え、善と愛の環境の中であれば、正しい方向に向い、輝かしい人生で自在な生活を送ることができるのです。

蒸し器から出てきた寿桃は、時間と争って凹みを入れなければなりません。以前、私たちは茶碗の蓋や小匙を使っていましたが、完璧ではありませんでした。色々試した結果、木製の杓子で作ったカーブが最も美しく、最も桃に似ていました。「何事も経験しなければ、知恵は生まれません」。初期の蝋燭作りのように、使い捨てコップや厚紙、銅管などでの型取りなど色々試しましたが、最適なものはヤクルトの空ビンでした。

また、凹みを入れる時の力具合も程よく握ってこそ、絶妙な流線形になるのです。ストロベリー味のピンク色のスプレーをする時も、均等な力加減で素早く作業し、位置も正確であって初めて、何重ものスプレー効果が出てきます。それは、菩薩道を歩む時に中道が唯一の成仏への道であることに似ています。

「縁を逃さず修行し、事にかけて鍛錬し、どんな所ででも精神修養する」と言われるように、困難を克服するのであって、困難に克服されてはならず、その気があれば困難ではありません。二〇〇〇年に印順導師の九五歳の卒寿を祝った時に、精舎で寿桃作りを始めました。二十二年来、一度も欠席したことのない徳宛（ドーワン）尼が、「感恩しかありません。大衆と善縁を結び、できなかったことができるようになったことに感謝しています。担うことを学び、喜んで協力することに他なりません」と言いました。その感恩の気持ちを持つことで、何をしても法悦に溢れ、福と慧を成長させただけでなく、祝福を受けた人も喜びが得られ、感謝に満ちるのです。

（慈済月刊六五五期より）

それぞれ苦難が異なる衆生に、臨機応変に対応する

口述・邱妙儒（慈済基金会慈善志業発展処東区ソーシャルワーカーチーム組長）
取材&編集・陳麗安　訳・心愛

問：現代社会の福祉資源は多様化していますが、慈済慈善活動の特色は何ですか？

答：多くのNGOや慈善団体は主に「特定の条件」を持つ対象に限ってケアをしています。それに対して、慈済慈善志業の最大の特色は、ボランティアが訪問ケアチームをつくり、特定の条件を設けることなく、「社会的に立場の弱い境遇」の人たちをケアしています。

ボランティアがケア対象の家に行くと、その対象者だけをケアするのではなく、家族構成やそれぞれ構成員のニーズを考慮に入れて家族全体を評価し、それに基づいて教育、医療、緊急支援などの提供を適切に行います。その後、少なくとも月に一度は訪問して査定し直し、ケアする期間が数週間という短期間のケースもあれば、数年間続く場合もあります。

一人暮らしのお年寄りや一人親、家庭内暴力を受けた女性や病気で経済的に苦しくなった世帯に対しても、ボランティアが実際に訪問した後、ケア対象者とするかどうかを判断し、直ちに支援を開始します。「人としての当事者、家族全員、あらゆる段階」をケアする方法で、全面的にサポートをすることも慈済の特色です。最終的な目標は、ケア対象者世帯が困難を乗り越えて自立できるようになることです。

ケア世帯の中には経済的な理由から学業を中断する子どもを多く見かけます。そこで、慈済は「新芽奨学金」という助成制度を作り、子どもの親孝行や特別なパフォーマンス、皆勤などでもって子どもを奨励しています。単に優秀な成績を求めるよりも、人として認めてもらえることで、子どもが前向きになることを期待しているのです。また、慈済ボランティアは、子どもが学ぶことを諦めなければ、将来「弱者」という悪循環から抜

台湾における慈善に関する主要データ

2020年の弱者世帯ケア件数

長期支援：
延べ111,536世帯

在宅ケア：
延べ152,077世帯

慈善ケースホットライン
0800-787-080

クイック・クイズ

Q…慈済ボランティアは何が得意ですか？
A…困っている人が苦境から出られるよう、寄り添うことです。
Q…慈善活動を一言で表してください。
A…人心の浄化と平和な社会です。

●彰化の慈済ボランティアがケア世帯を訪問。（撮影・黄筱哲）

け出すことができると励ましています。社会全体にとっても、慈善と教育を結合させることで、派生的に出てくる社会問題や対策に費やすコストを減らすこともできます。

私は幼い頃から母について慈済の活動を見てきました。そのおかげで人を助けることにとても興味を持ち、大学で関連学部を卒業した後、社会福祉局や慈善団体で働きました。そして十七年前、静思精舎でボランティアをしていた時に、慈善活動には多くの人手を必要とすることを知って、ボランティアから職員になり、今に至っています。

一九九二年、慈済基金会が初めて専門学歴を持つソーシャルワーカーを雇用する前、全ての慈善活動は、ボランティアと静思精舎の常住尼僧たちが行っていました。支援対象が増加すると共に、ケアケースの事情が複雑になってきたことで、ボランティアはケアや寄り添いをするだけでなく、持続的な経過追跡や記録などの事務も日増しに多くなり、専門のソーシャルワーカーが慈善に参加して、ボランティアを助けるようになったのです。

慈済ボランティアは台湾全土のコミュニティーにいます。もし全てのボランティアが繋がるようになれば、非公式

の「セーフティーネット」ができあがり、より多くの慈済人がいれば、ネットはより緊密で安全なものになります。政府の進める社会安全ネットワークは、公的機関と民間団体が協力してサービスにあたる連絡業務が主ですが、地域社会に支援を必要とする人がいるなら、福祉の認定や条件を満たしていなくても、地域の慈済ボランティアのネットワークを通すことで、より速く、助けを得ることができ、政府の援助が来る前の生活を補完することができるのです。

近年の「弱者」は、もはや単純に経済的な要因ばかりではなく、対人関係で生じる心身の問題が益々増えており、関連ケアが日増しに重要になって来ています。台湾では、長期的な経済支援を受ける世帯よりも、定期的に寄り添う必要のある「在宅ケア」の案件が多くなっています。

五十五年間、慈済は「慈善で人助けし、弱者を救い貧困者に寄り添う」ことを終始変わらない中心的な理念としてきました。専門的な経歴を持っているかどうかに関係なく、ボランティアは「ニーズを必要としている人を支援しているか」を重視しています。このような無私の精神で奉仕するボランティアのおかげで、慈済の慈善はより多くの家庭が困難に陥るのを予防しているのです。

（慈済月刊六五四期より）

特別報道・慈済55

回収資源の価格が変動しても リサイクル活動を止めてはいけない

口述・陳淑敏（台北松山区慈済ボランティア）
取材&編集・陳麗安　訳・心瑩

問：回収箱にさえ入れれば、ゴミの量が多くても心配は要らないのでしょうか？

答：「間違った所に入れた資源ゴミはゴミになりますが、正しい所に置けば、宝です」。慈済は三十一年間、環境保全を推進してきて、リサイクルボランティアがコミュニティーで資源の回収を着実に行い、ゴミによる汚染を減らす努力をしてきました。しかし、リサイクルは良いことですが、なるべく使う量を減らし、できるなら使わないようになればもっといいはずです。

五十前、私は生計のために金属くずのリサイクル業を始めました。機械がまだそれほど発達していなかった時代で、全て手作業でした。一九九〇年に慈済の会員になってからは、リサイクルステーションで回収分別を手伝うようになりました。元々リサイクル業をしていたため、乱雑さや汚れは気になりませんでした。初めは単純にボランティアとして参加していましたが、やがて、慈済ボランティアの講演を聞いてから、資源がゴミになると自然の生態系に深刻なダメージを与え、いつしか人々の生活にも影響をもたらすことを知り、リサイクル活動に一層励むようになりました。

私たちは、リサイクルステーションで回収物を分別するだけでなく、定期的に地域の公園の指定場所で回収活動を行っています。以前、ある廃品拾いのおばあさんが、慈済が公園で回収作業をしているのを見て、空の台車を引っ張って近寄って来たことがあり、ボランティアは自主的に回収したカートンボックスをおばあさんの台車に乗せてあげたことがあります。おばあさんは回収品を売った収入で食べていく必要があるからです。慈済はリサイクルの活動で、弱い立場の人々の仕事を奪い取るつもりは決してありません。

ここ数年、中国が海外からごみの輸入を禁止したことにより、台湾のリサイクル市場の価格は全般的に下落しています。ところが使い捨ての廃棄物が益々増え、リサイクル業者は、値段が低すぎて採算が合わなくなって、川上の工場が一部の物の買い取りを拒否するようになったため、環境と弱者家庭の生計に影響が出てきました。一方、慈済のリサイクルボランティアは、回収業者が回収を拒否しているガラスやビニール袋は引き続き回収して細かく分別し、引き取ってくれる業者を探したりして、回収理念を堅く守っています。後世に汚染のない環境を残したいだけなのです。

資源を宝に変える方法では、「永続」という概念が非常に重要です。より多くの人に、永続的な環境保全の理念を理解してもらって、それを実行に移してもらうために、慈済基金会は共通の理念を持つ人に様々なリソースとチャンスを提供してきました。

例えば、回収を拒否される資源の一つに古着があります。若者が立ち上げた「サステナビリティ」を中核に置いたファッションブランドは、ゴミを出さない信念の下に、回収したデニムの古着を、美しい服やバッグなどに作り直しています。生産工程では、再就職の女性や地元の仕立屋を雇っていますが、その中には弱者家庭の人も多く、循環経済を実践すると同時に、慈善行為も行なっています。

慈済ボランティアが架け橋となって、ブランドと各地のリサイクルステーションが協力し合い、必要な材質の古着をリサイクルステーションが提供することで、「廃棄物を宝に変える」活動が持続できるようになりました。

リサイクルボランティアの平均年齢は年々高くなっています。もし環境と人力の条件が噛み合えば、リサイクルステーションは、介護の機能を組み合わせることができ、また、ボランティアとしてやって来る年配者や心身障害者の世話もすることができるようになるでしょう。その他、インテリアプランニングなどの専門能力を持つ若者に、リサイクルステーションを改造してもらい、地域の人々がもっと積極的に訪れ、環境ボランティアがより安全で快適な環境になるよう試みています。

私は長年リサイクルに携わってきました。これからも若者たちが環境保全の課題を真剣に受け止め、小さな動作で環境に影響を与えないよう、自分を過小評価しないことを願っています。三十年以上も一生懸命この仕事をしてきましたが、これからも続けます！とにかく、地球は皆のものであり、一緒に守らなければなりません。（慈済月刊六五四期より）

●新北市双和リサイクルステーションで、ボランティアがグアバ用のビニール袋を分別していた。（撮影・黄筱哲）

クイック・クイズ

Q：一番好きなのはどんな回収物ですか？

A：DIYで日常生活に取り入れることができるものなら、全て好きです。

Q：あなたにとって、慈済リサイクルステーションはどのような場所ですか？

A：環境ボランティアの楽園であり、生命の良能を発揮する場所でもあります。

慈済 環境保全に関する数値

回収物：89,514トン

台湾全土で回収された再利用廃棄物の1.58%を占める。

回収ビニール袋：3,619トン

2020年1月から12月までの統計

もし、台湾独自の骨髄バンクがなかったら

口述・蘇蕙鈺（慈済骨髄幹細胞センターデータバンク及び管理責任者）インタビューと編集・陳麗安　訳・荳荳

問：民間団体の力で国際基準を満たした骨髄バンクを永続的に運営することは可能なのでしょうか？

答：海外の骨髄バンクは登録されている人種が異なるため、台湾の血液疾患患者がマッチング相手を見つける可能性は非常に低いのです。一九九三年、台湾で「人体臓器移植条例」の改正案が可決されて、非血縁者間での骨髄提供ができるようになってから、衛生署は各大病院を招いて、骨髄バンクプロジェクト会議を開きました。骨髄バンクを立ち上げるには、長期的に莫大な人力と物的資源、資金が持続的に投入されなければならないため、多方面の考慮と推薦の下に、慈済が計画を任せられ、慈済基金会骨髄寄贈データセンターが設立され、今は「慈済骨髄幹細胞センター」と改名されました。

非血縁者間の造血幹細胞移植でのマッチング過程は、先ず、移植手術をする主治医からの申請、骨髄センターからのマッチング報告、移植担当病院によるドナー候補者の選定、センターからドナーへの通知、寄贈意欲の有無の確認、ヒト白血球抗原（ＨＬＡ）の再検査などを経て、確定したドナーに対して、センターによって健康診断と造血幹細胞採取が行われます。そして、細胞が移植病院に渡され、患者に移植されます。

「なぜ慈済基金会は患者に料金を請求するのか？」

慈済骨髄幹細胞センターに入社したばかりの頃、よくこういう疑問の電話を受け取ったことを覚えています。大衆からすれば、当然、慈済は患者から料金を請求すべきではないと思っています。しかし、殆どの人は、台湾のマッチングと骨髄採取の費用が既に世界のどの国よりも遥かに低いことを知ろうとしません。そして、骨髄バンクというものを維持することが如何に大変かということも。

各国の基準は異なりますが、例えば台湾の患者がアメリカの骨髄バンクに申請した場合、マッチング成功後の費用は約九十五万台湾元、日本の骨髄バンクは約五十二万元で、その上に寄贈者の諸々の

●台南の造血幹細胞寄贈血液検査登録活動。（撮影・黄筱哲）

慈済造血幹細胞寄贈に関する統計

台湾全土の骨髄ケアチームボランティア人数
7,055人

志願ドナー登録者数
累計450,761人

累計移植件数
5,942件

2021年3月31日現在

慈済骨髄幹細胞センター

造血幹細胞の寄贈、寄贈の流れ、台湾全土の血検査登録活動について知りたい方は、QRコードで公式サイトにアクセスするか、電話：03-8561825 内線3217、3517にお掛けください。

検査費用と患者の移植前後の関連医療費を加えると、通常百万元を超えます。

海外と比べて、台湾の骨髄提供費用は世界で最も安いのです。そのコストは二十八万元で、患者は健康保険では賄えない部分の合計十一万三千七百三十五元を支払うだけで済みます。その他の経費は骨髄センターが負担します。

国内の患者をケアし、マッチングの成功率を高めるために、慈済骨髄幹細胞センターは自力でコストを負担し、国内の患者に初期的なマッチングで五人のドナー候補者を見つけます。そして、主治医が将来的に生存率の最も高いドナー候補を選定し、骨髄ケアチームのボランティアがその情報を基にその人の住所を探します。台湾で適切なドナーが見つからない場合は、海外の骨髄バンクに申請する必要があり、一人の登録者とマッチング検査をするだけで、患者は三～五万元の費用がかかるのです。

「慈済骨髄幹細胞センター」は設立されて二十八年目になりますが、自力で運営を維持するのは非常に困難です。このセンターは、政府の資金で支えられている多くの海外骨髄バンクとは異なり、設立当初からお金も人も資金も技術もありませんでした。しかし今では、国際的なハイレベルの骨髄バンクと言われるまでになり、一部の民間の寄付を除いて、主

に海外の患者が支払う費用で維持されています。また、ボランティアは、国内の患者とその家族にインタビューを行います。もしも経済的に困難があって、移植代を負担できない場合は、必要に応じてセンターに全額補助を申請します。さらに一歩踏み込んで、慈済基金会の慈善訪問ケアが引き継いで、生活補助や緊急支援などを行います。例えば、二〇二〇年にはセンターが七十五人の患者とその家族の世話し、合計七百万元余りを補助しました。

自給自足は容易なことではなく、これまで、慈済骨髄幹細胞センターが運営を続けて来られたのは、台湾全土の専門的な訓練を受けた骨髄ケアチームのボランティアの努力があったからです。感謝を申し上げます。それによって、人件費が抑えられ、患者さん家族の負担も軽減できたのです。

何年にもわたって、私はあまりにも多くの苦痛を伴った治療を目にしてきましたが、幸いに回復した患者と生まれ変わった奇跡を一緒に喜ぶ場面もありました。精一杯寄り添うだけでなく、あらゆる寄付金を最も必要なところに使うこと目指しています。大衆に造血幹細胞寄贈に対する認識が広まり、将来、造血幹細胞寄贈が献血と同じくらい普及し、より多くの患者さんに貢献できることを願っています！（慈済月刊六五四期より）

心の超越

◎文・釋德侃／訳・済運

自分を小さくすれば、
人と接する時、柔軟性に富むようになる。
欲念を減らせば、心は無限に広がる。

修行は「功」、人助けは「徳」

人生は無常で、生命はひと呼吸の間にあります。二十七日のボランティア朝会で上人は、「皆が苦、空、無常の道理を体得すべきで、貴重な人生を一個人や自分の家庭という領域に留めるのではなく、絶えず超越し、心と視野を広くして群衆に分け入って世の事情に直面して初めて、今生の良能が発揮され、生命の価値が上がるのです」と開示しました。

上人によれば、修行で求める解脱は心の解脱です。心を自分一人の世界に閉じ込め、自分が愛する人だけに関心を持ち、自分や家族のためにだけ求めて止まないのではいけません。一生名利を追求しても、永遠に満足することはできないのです。その実、どれだけ多くお金を稼いでも、人生の終点では何も持って行くことはできません。もし、心を広く持って大衆と接し、財を運用して物資で他人を利することを知れば、数多くの飢餓に苦しむ人に食を与えることができ、貧しい人は安定した生活を送ることができるのです。

「縁を逃さず、時間を善用し、片時たりとも無駄にせず、人々に愛を呼びかけて、そのエネルギーを結集させるのです。そして、数字にとらわれることなく、小額の寄付金であっても長く続けば、積もり積もって大きな力となります。それは私が花蓮の慈済病院を建設すると決めた後、日本の企業家からの二億ドルという善意の寄付を

お断りして、大衆から五十元や百元の寄付を集めるほうを選び、一人ひとりのレンガ一つ、セメント一袋でも病院は完成できたことからも分かります。この病院には非常に多くの人の功徳が集まっており、実に豊かな情と広い愛がこもっているのです。これが慈済の慈善における理念であり、愛のエネルギーを広げ、この世に平坦な大道を築いて、永遠の『覚有情』(究極の大愛)を呼びかけているのです。長く続く大愛は五十五年前の一日五十銭貯金に始まって今に至っており、慈済の大愛は世界に広がっています」。

「一人ひとりが目の前の利益だけを見て、自分の心の世界にある愛にだけ執着していれば、そこから貪、瞋、癡など無明の煩悩が派生してきます」と上人は開示しました。社会で見られるように、多くの事件は愛が憎しみに変わったもので、愛し合っている時は仲睦まじくても、自分が求める人に固執するあまり、それが叶わない時に

相手を殺害したり、自殺したりします。利己的な愛欲で相手を殺害したり、自分を滅ぼしたりするのは全く愚かとしか言いようがありません。死は一切の終わりではなく、因縁と業が来世にまで付き纏ってきます。殺害は重大な悪業ですが、自殺も殺生の業と、その上に親不孝を犯しています。両親が授けてくれた体を害するのは、両親を傷つけるのも同じで、とても大きな罪なのです。

「両親が産んでくれた体を使ってこの世で奉仕し、人生で大きな意義を達成すべきだと知らなければいけません。私たちが呼吸をしている間、この体の健康に責任があり、生命を永らえなければなりません。また、真理を追求して善行し、功徳を成就すべきです。自ら修行することが『功』であり、人助けすることが『徳』です。『徳は得なり』と言われるように、私たちが心身の力を奉仕する時、同時に自分自身が修行しているのです。菩薩道では、一歩踏み出すごとに衆生を利し、次の一歩は自分の願を実践し、その次の一歩は善行することで功徳が成就され、その功徳は両親に回向されます。両親の恩に報いるには、人間（じんかん）に福をもたらし、生命でもって慧命を成就するのです」。

上人はこう強調しました。「修行するなら欲念を超越し、心を大きく持たなければいけません。その大きさは天地をも包み込むべきで、欲念を放任して天地を包み込むほど大きくしてはいけないのです。欲念を小さくすれば、心は無限に広がって自由自在になり、制限を受けなくなります。自分を小さくすれば、空間が広がります。この超越した愛で人と接してこそ、情は長く続き、愛は大きく育つのです。生きている間はこの世のために奉仕し、自然の法則によりその日が訪れた時は、飄々と解脱して去れば、心身共に軽やかで自在になれ、これこそが福というものなのです。生生世世、この福報因縁でもって、菩薩道を歩み続け、慧命を永らえれば、去るのも来るのも自在になります。（慈済月刊六五五期より）

防疫と人助けの両立

慈済骨髄幹細胞センターの新しい挑戦

文・李委煌　訳・江愛寶

統計によれば、一回の造血幹細胞の寄贈、受贈過程の背後には、五百人の慈済ボランティアの努力や奔走など無償の奉仕がある。二十七年の歴史を持つ慈済骨髄幹細胞センターは、二〇二〇年再びハイレベルの国際認証を取得した。世界九十三の骨髄バンクのうち、その認証を取得しているのは十カ所だけである。人命救助の任務は何時になっても簡単なことではない上に、世界に蔓延したコロナ禍が加わった……。

二十七年来、慈済骨髄幹細胞センターは造血幹細胞の提供を呼びかけ、寄贈及び輸送において、いつも様々な困難にみまわれてきたが、しかしそれら全ての過程が血液疾患患者の生命に希望を与えることに繋がるので、一歩も後退してはならないのである。去年、新型コロナウイルスが世界に蔓延し、各国が国境管制を実施したため、年初に、慈済骨髄幹細胞センターは「事前対応」の必要性を感じた。命を救うのは時間との戦いであり、コロナ禍で行動が遅れることで残念な結果を招いてはならないのである。

台湾のコロナ禍は上半期、比較的緊迫していた。もし、データバンクからヒト白血球抗原（HLA）がマッチするドナーが見つかっても、その方の家族や家族の中の年長者がこの非常時に病院まで行って採血や健診、または入院することに不安を感じて、「寄贈を後悔」するかもしれない。そこで、慈済は病院の出入り口や移動経路を状況に合わせて調整し、ドナーの健康安全を確保した。

国際線は入境制限やロックタウンで欠航が多く、海外の血液疾患患者は辛い気持ちで救命の希望を待っている。慈済はどのようにしてやっと手に入れた造血幹細胞を国外に輸送し、即座に患者の体に移植できるか、これは極めて困難な挑戦なのだ。

無名の「救命配達者」に感謝する

遺伝子が比較的似通っていて、台湾の慈済骨髄バンクでマッチングを成功させた海外の患者は、中国人が一番多い。去年の上半期に両方ともコロナ禍はやや落ち着き、幸運にも「骨髄配達」をしてくれる貨物会社が現れた。台湾のドナーからの造血幹細胞の多くが、混載で中国の決まった場所に送られた後、患者に移植する各都市の病院が専門人員を派遣して、

そこから骨髄を持って帰って移植した。

骨髄配達者は、中国に到着後、十四日間隔離され、それが過ぎて台湾に戻ると、もう一度二週間の自宅待機をしなければならない。コロナ禍の下で、一人の人間が一カ月の自由を犠牲にして、寄贈者と受贈者の双方の間で「人命救助の配達人」の役割を果たしているのである。

他の国や地域の白血病患者に対して慈済は、世界骨髄ドナー協会（World Marrow Donor Association 略称WMDA）の世界の骨髄バンクに対する便宜的な措置の提案に沿って、花蓮慈済病院検査医学核心実験室が、「末梢血幹細胞」または「リンパ球」を耐低温パックに分けて低温処理を施すことに協力し、「乾式液態窒素低温容器」に入れて輸送することで、国を跨いだ人助けを行うことにした。現地の病院は、持ち帰った後で解凍してから患者の体内に移植した。

慈済骨髄幹細胞センターの楊國梁（ヤン・グオリアン）主任がこう説明した。造血幹細胞は四つの耐低温容器に分けて入れられ、摂氏零下百八十五度の低温で冷凍され、液体窒素の低温桶に入れたあとGPS装着を付けて空輸で国外に運ばれる。

慈済骨髄幹細胞センターは長年、臍帯血を運搬する経験は豊富だが、冷凍造血幹細胞を運ぶのは初めてだったため、冷凍する過程と容器への入れ方では何度も

確認する必要があった。十一月までに慈済は、この方法で造血幹細胞をアメリカ、オーストラリア、マレーシア、シンガポール、韓国及び香港などの国と地域に配送した。楊主任は、「冷凍後また解凍する時、技術的な取り扱いを誤ると細胞が死んでしまい、移植に重大な影響が出ます。従って、冷凍、解凍段階で技術的に正しい操作をしなければならないのです」と説明した。

もう一つ特殊な例がある。去年四月、

●花蓮慈済病院の林欣栄院長は骨髄ボックスを花蓮空港が用意した長テーブルの上に置いてから、直ぐ安全距離まで下がり、シンガポールから専用機で、台湾まで骨髄を取りに来る人に引き渡すのを待った。（撮影・黄思齊）

患者がいるシンガポールから骨髄を受け取るために、チャーター便で台湾に人を派遣し、「駐機場で物を受け取って、入国しない」方式を採用して、台湾ドナーの造血幹細胞を「フラッシュモブ」的に持ち帰った。慈済骨髄幹細胞センターが設立されて以来、初めて「取り継ぎだけで、入国はしない」方式で済ますことを了承した例である。これは花蓮空港と空港警察署花蓮分局にとっても前列のない人道支援の経験だった。

再びハイレベルの国際認証を得る

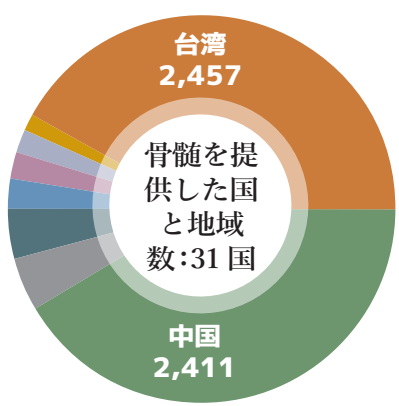
慈済骨髄幹細胞センター事務局長の蘇蕙鈺（スー・フイユー）係長の説明によると、コロナ禍と安全を考量して、登録者のマッチングが成功した後、健康診断から寄贈前までの二十八日間及び寄贈後の十四日間の段階で、新型コロナウイルスに関するアンケート調査を行い、ドナーの造血幹細胞に感染の心配がないことを確認しているそうだ。

パンデミックの衝撃の中でも、慈済骨髄幹細胞センターは去年再び、世界骨髄ドナー協会（WMDA）の「ハイレベル」の国際認証を得た。それは、センターの品質と寄贈の過程が、完全に国際規格に合致していることを意味している。寄贈の呼びかけと登録手続き、マッチング、寄贈、健康追跡と管理、個人情報の管理、ひいては、ボランティアが取り扱う伝票書類、日付、サイン、試験管の色など全ての段階で、厳格な国際認証基準を満たしているのだ。

アジアにある多くの骨髄バンクの中でも、許可を得ているのは日本と台湾だけにあり、世界九十三の骨髄バンクでも十を数えるだけである。パスした後、四年に一度、評価を見直されるが、それは台湾の骨髄バンクの運用が肯定され、国際間で目にすることができる台湾の愛とマッチングサービスの品質の高さを意味している。去年六月、慈済骨髄幹細胞センターも再度、SNQ国家品質標章認証を得た。その栄誉と肯定は四年連続して継続している。

慈済骨髄幹細胞センター

寄贈志願登録した人の累計 448,853 人
今まで移植した案件
5,835 症例



タイ	70
アメリカ	120
香　港	123
シンガポール	147
韓国	240
その他	267

2020年10月31日現在

八月には約五百名の平均年齢六十歳を超えたボランティアが、厳格な防疫体制の下に、同じように慈済骨髄ケアチームボランティアの認証教育訓練講座に参加した。彼らは台中、南投、苗栗などのボランティアで、平日は造血幹細胞寄贈の呼びかけと受贈患者のケア訪問を行なっている。従って一人ひとりが「血液検査登録活動」、「血液再検査」、「健康診断」から「寄贈段階」、「寄贈後の健康追跡」までのあらゆる過程を、よく理解しなければならないのだ。

ボランティア認証の教育訓練講座は毎年、台湾全土で十数回開かれていたが、去年はコロナ禍と会場を考慮して、九月までに四回開かれただけである。蘇係長によると、現在、慈済の一万人を超える認証ボランティアは、奉仕範囲が広く、造血幹細胞寄贈の血液検査登録活動以外に、病院で移植患者への付き添いもする。毎回の造血幹細胞の寄贈、受贈の過程の背後には、平均して五百人のボランティアの努力がある。

待っている人がいるのを忘れないで

造血幹細胞の活性度合いは歳と共にだんだん下がって来る。志願登録したドナーの適正寄贈年齢の上限は五十五歳（五十六未満）である。それ故に、慈済骨髄バンクは毎年、一万人の志願寄贈登録者を新らたに募ることを目標にしている。血液疾患患者がマッチング相手を探している時に、より大きなチャンスと希望が持てることを期待できるからだ。残念なことに、去年は年初のコロナ禍のために、一時的に各地での血液検査登録活動が中止され、五月を過ぎてやっと再開された。

九月、慈済雙和静思堂の血液検査登録活動の会場に、若い蔡（ツァイ）さんが朝早く到着した。彼女はすでにインターネットで予約してい

●去年９月、新北市双和静思堂で骨髄寄贈血液検査登録活動が行われ、ボランティアが大衆に詳しく説明していた。志願登録者は累計４４万人を超えたが、「規定年齢を超える人」が約、７～８万人おり、加えて寄贈登録を後悔するケースもよくある。そのため、毎年、新しい登録者によってマッチング率を上げる必要がある。（撮影・蕭耀華）

た。彼女はかつてメディアの報道で、ある女性が造血幹細胞を急性白血球患者に寄贈した後、慈済ボランティアと一緒に寄贈登録を呼びかけるようになった記事を見た。そこで、蔡さんも機会を逃さず、骨髄バンクの潜在的な支援者の一員となろうと決めた。

蘇係長はこう率直に言った。慈済骨髄バンクが運営を始めてから二十七年、蔡さんのような台湾の愛を代表する志願登録ドナーは、累計で四十四万人を超えたが、現在「規定年齢を超えた人」が約七～八万人いることと、マッチングした後で約半分の人が何かの理由で寄贈を断ったり、寄贈できなかったりする分を考慮しなければならないのだそうだ。従って、毎年もっと多くの若い人に袖を捲って参加してもらう必要があるのだという。

二〇〇三年ＳＡＲＳ感染症の期間中、その年の四月から一時的に、中国と香港地区への骨髄提供と登録活動を全部中止し、七月以降になって全面的に再開したことがある。「前車の覆るは後車の戒め」と言われるように、コロナ禍で、慈済骨髄幹細胞センターの専門家としての準備と先手を打った対応をしてこそ、パンデミックの今、命を救うために余裕を持って時間と競走することができるのである。（資料提供・蘇蕙鈺、劉蓁蓁）

（慈済月刊六四九期より）

七月の出来事

訳・済運

07・01	慈済基金会は「弱者世帯学生夏季栄養救済プロジェクト」で、コロナ禍の影響によって生活に影響が出た弱者世帯に、安心生活ボックスと健康野菜ボックス、白米などを配付する。夏休みの1カ月目に、14の県と市の45339世帯を支援する。
07・02	◎慈済基金会がモザンビークで初めて建設する大愛村が本日、ソファラ州ニャマタンダ郡クラ地区で起工した。175棟の恒久住宅と職業訓練所、診療所、派出所などの施設が含まれている。 ◎マレーシアのコロナ禍は厳しい状況にあり、医療が逼迫している。慈済クランタン支部は2日と11日に、ICU病床2床を含む医療設備をタナメラ病院に寄贈すると共に、安心生活パックを医療スタッフに届けて励ました。慈済セランゴール支部はクアラルンプール中央病院の新型コロナウイルス感染症用病床不足を受けて、50床の病床と酸素計、酸素調節器、注射器、血圧計など医療器材を寄付することを決定した。

	◎6月20日深夜、アメリカ・シカゴの西方郊外が竜巻と暴風雨に襲われ、負傷者が出たほか、100 棟を超える建物が被害に遭い、約3万世帯が停電した。翌日、慈済シカゴ支部は視察を始め、26日と27日に重被災地であるウッドリッジ村被災者資源センターでの配付活動に参加し、支援物資を提供した。本日、市政府の要請を受けて、2回目の活動を行い、ショッピングカードとエコ毛布、即席飯、マスクなどを配付した。
07・03	チリ・サンティアゴのコロナ禍は厳しさを増し、社会的弱者の生活が困難に陥っている。6月28日、慈済ボランティアはキリクラ市の貧困地区を訪れて、30世帯が特に食糧や物資が不足していることを知り、本日、冬季の配付が行われた。
07・04	6月19日、ニュージーランド・オークランド市南部で竜巻が発生し、千世帯余りが被災し、約60棟の家屋が大きく損壊した。慈済ニュージーランド支部はパパトエトエ地区に対して緊急支援することを決め、本日支部で、見舞金と毛布など、1回目の配付を行なった。
07・05	◎慈済フィリピン支部はフィリピン華商連総会の申請を受けて、5日から17日まで志業パークをワクチン接種会場として貸し出した。慈済人医会が毎日、2〜3人のメンバーを動員して接種資格の確認などで支援し、ボランティアが後方支援として、会場経路の案内などを行なった。 ◎慈済マレーシアのセランゴール支部はクアラルンプール社会福利局から連絡を受け、5日と6日の両日、2450個の生活物資パックを8つのコミュニティーに届け、コロナ禍で生活に影響が出た住民を支援した。
07・07	◎慈済マレーシア・スレンバン支部は福利部の支援要請を受けて、本日、ニライ体育館で、コロナによる感染隔離者、軽症者治療センターの患者及び医療スタッフ、行政関係者に対して、食料品や日用品などの物資を提供した。 ◎慈済インドネシア支部は1500床の病床を寄付して、ジャカルタ市にある幾つかのコロナ感染隔離地区のニーズに応えた。

07・09	慈済基金会は第一線の防疫人員の勤務時の安全を守るために、合計１４３０個の「防護フェースシールド」を順次、台湾全土の１２の県政府消防署に寄付した。
07・10	慈済基金会は３月２３日にセルビア難民委員会から、難民キャンプ支援の要請の手紙を受け取っていたが、コロナ禍のために行動が遅延していた。ドイツ、オーストリア、オランダの慈済ボランティアが今日、３日間にわたって、２６５０枚の服と洗濯パウダー２万キロ、ベッドカバー３千枚、食事トレー３千個を配付した。
07・11	チリ・サンティアゴの慈済ボランティアはラピンタナ市のＪＨＺ学校で、コロナ禍貧困救済活動を行い、学校の教師たちと共に２百の貧困世帯を支援した。
07・12	◎モザンビークの慈済ボランティアはニャマタンダ郡農村部の診療所のニーズに応え、防疫のためにフェースシールド１６００個と防護ゴーグル５０個、医療用エプロン３００枚を寄付した。
07・15	◎慈済インドネシア支部はインドネシア国軍（ＴＮＩ）と共同で、１２日から１６日及び１９日から２４日までジャカルタのチェンカレン慈済大愛学校において、合同ワクチン接種センターを設け、新型コロナウイルスワクチンの接種プロジェクトを加速させる。 慈済マレーシア支部は、現地の医療人員が在宅隔離しているコロナ感染者の状態を把握し、重症化した時に入院治療させられるよう、中スプラン・プライ郡衛生局に８０台の酸素計を贈与した。
07・18	マレーシアのコロナ禍は厳しい状況にあり、慈済セランゴール支部は「フードケア」というコミュニティーケアプロジェクトを始動した。４０のリサイクルステーションと修行拠点から食糧を配付し、コロナ禍で生活に影響が出た弱者世帯を支援する。本日から展開し、４８２４世帯が恩恵を受けた。第２回目は２５日に行われる。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２１年８月１８日発行・２９６号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

静思堂がワクチン接種拠点に変身

新北市新店静思堂において、台北慈済病院の医療チームによる高齢者を対象とした新型コロナワクチンの接種が行われた。8つの県と市に、合わせて15カ所ある静思堂で順次、ワクチン接種会場が開設された。静思堂のバリアフリーで、広々として風通しの良い特色が、医療チームとコミュニティーの住民に接種会場として安心できる環境を提供している。（撮影・蕭耀華　新北市新店区 2021.06.15）

慈済日本サイト　慈済ものがたり